

令和3年度 浜田教育事務所だより

第84号 令和3年7月9日

- ◆調整監あいさつ (p.1)
- ◆特別支援教育について (p.3)
- ◆各市町の取組～邑南町～ (p.6)
- ◆人権教育について (pp.2-3)
- ◆各市町の取組～浜田市～ (pp.4-6)

「みんなの学校」をつくるために

調整監 石田 浩一

皆さまがこの便りを目にされるのは1学期末を迎えて慌ただしくされている頃かと思ひます。各学校におかれましては、感染症対策に万全の注意を払いながら、緊張感のある日々の中で、健康と安全を第一に考えつつ、すべての児童生徒の学習権を保障するために、特色ある教育実践に励まれていることに敬意と感謝を申し上げます。

先日、書棚の整理をしていたところ、ある講演会でメモをしていたものに目が留まりました。その講演会は、元大阪市立大空小学校初代校長の木村泰子さんが講師で、「みんなの学校が教えてくれたこと」という演題でした。すでにご存じの方もおられるかとは思いますが、木村さんは、『すべての児童に居場所がある学校を作りたい』『学校が変われば、地域が変わる。そして社会が変わる』という思いで、児童と職員だけでなく、保護者や地域の人も一緒になって、誰もが通い続けることができる学校をつくりあげてきた方です。その木村さんが、校長として学校経営の根幹に据えておられたことを以下のようにメモをしていました。



「すべての子どもを多方面から見つめ、全職員のチーム力を育てるために」

- 主語を「子ども」に変える
 - ・子どもが学ぶ 子ども同士が学び合う授業をつくる ・「教えるプロ」から「学びのプロ」へ
- 目的と手段を混同しない
 - ・ゴールイメージを共有する ・山を登る際の「登り方」と「多様なルート」を探る
- 人の力を活用する
 - ・職員室が安心できる場所になっているか ・職員一人では子どもの命を守ることはできない

あくまでも自分に引き寄せて拝聴したメモですので、木村さんの本意とは相違があるかもしれませんが、一つの公教育の姿の例として、共感いただけるところがあるのではないかと思います。

さて、毎年行っている教育事務所長訪問を5～6月にかけて実施させていただきました。実施にあたっては、各校ともに貴重な時間を取っていただき、また、丁寧に学校の様子をお伝えいただきましたことにお礼申し上げます。浜田教育事務所の今年度の取組にしっかりと生かしていきたいと考えております。

面談では、「学校教育目標の実現に向けた重点」「組織運営の取組」などについて、グランドデザイン等でお示しされながらわかりやすくお話いただきました。具体的には、学校の組織力向上のために「つながり（同僚性の構築）」「地域との協働」「働き方の見直し」などをキーワードとして、職員みんなでよりよい学校をつくっていかうとされる思いや願いを強く感じました。また、そのことの中には「子どもの存在」があり、周りには「地域」「保護者」「職員」がしっかりと手を携えながら、日常の対話（雑談や相談）を大切にしておられることが、すべての学校の共通項として存在していました。

わたしたち浜田教育事務所も、これまでと同様に管内75校のそれぞれのニーズにお応えできるように、全スタッフが総力を挙げて、お力添えをさせていただきたいと考えております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

人権教育について

進路保障の充実

～性の多様性にひらかれた学校づくり～

人権・同和教育指導員 竹中律子

令和2年4月島根県教育委員会よりリーフレット

「性の多様性が認められる学校づくり～自分らしさ・その人らしさを大切にする学校づくり～」が出されました。



性的指向や性自認に関わることで、いじめや不登校、自死の原因につながっている事例があります。性的指向や性自認等で悩んでいる子どもも含め、すべての子どもたちが安心して生活できる学校づくりが進むことを願っています。

いじめや部落差別と一緒に、性のあり方に悩む子どもの姿は、大人からは見えにくいものです。しかし、「性の多様性にひらかれた学校づくり」を心がけることで、悩んでいる子どもたちを間接的にサポートすることが可能になります。

「性の多様性にひらかれた学校づくり」のポイントについて、考えてみましょう。

- 1：同級生の共感力を育む
- 2：学校生活にある男女別を前提としたシステム等を減らす
- 3：教職員が変われば子どもたちのコミュニケーションも変わる

1：「同級生の共感力を育む」

民間団体の実態調査では、高校卒業までに自分が性的マイノリティであることを誰かに打ち明けたことがあると回答した人たちの72%が、カミングアウトの相手として同級生を選んでいました。

「なにか悩みごとがあれば信頼できる大人に相談するように」というセリフは、性の多様性をめぐる話題では実はあまり当てにならないようです。むしろ同級生こそがキーパーソンであり、子ども間でのポジティブなやりとりをどう引き出せるのかがカギであると言われます。

クラスの中には、テレビやマンガ、動画サイトなど

で多様な性のあり方についての肯定的な情報にふれている子どもたちが一定数いるかもしれません。そんな子どもたちの関心、共感力を引き出せるように保健室や各教室に性の多様性に関するポスターやマンガを置く方法は有効です。大分県が発行しているマンガ『りんごの色』は、中高生に大人気で、インターネットからも閲覧できます。

2：「学校生活にある男女別を前提としたシステム等を減らす」

当事者の願いの中で多いのは、「不要な性別欄、不要な男女分けをなくしてほしい」「名簿や整列の並び順を男女混合にしてほしい」「『その女子』、『男子は〇〇だから』など男女で一括りにして扱わないで」などです。取組の見直しを進め、学校生活にある悩ましいシステムを減らすことが大切です。その際、理由を言わなくても使える選択肢が必要です。『自分には特別の理由があるから』と子どもに申告させ、わがままではない根拠を述べさせるなどのハードルを課すことは、当然持っているはずの自由や権利を、他の人たちの理解がなければ行使できないものにしてしまうこととなります。人にはさまざまな事情や違いがあるのだから、みんなで同じように振る舞わなくてもよいし、選択肢を増やしてもいいはずで、誰もが安心して生活できるために、学校の取組を柔軟に見直していくことが必要です。

3：「教職員が変われば子どもたちのコミュニケーションも変わる」

学校の中で変えられることを一つでも見つけて話し合ってみる。それと共に日ごろから教職員一人一人が性の多様性について肯定的に言及できるようになる研修が大事です。自分がLGBTQかもしれないと思っている子どもは、心の中に「見えないメモ帳」をもって、「あの先生は性別を決めつける話し方をしないのでいざとなったら言えるかも」「この人には絶対言わない」など、周囲の人たちの日ごろの言動が細やかに記録されていると言われる。大人にはなかなかカミングアウトされにくいですが、日ごろの言動によって子どもたちに安心感を与えることはできます。

また、相談に対応できる体制づくりも大事です。

その際個別対応にあたっては、本人の意思や同意を確認することが重要です。また、男性か女性かの二者択一ではなく、いろいろな人がいることが当たり前との前提で接することが大切です。

カミングアウトがあった場合には、子どもが何に困り、どうしたいのかを尋ね、対策を一緒に考えていくことが大切です。このとき注意したいことに「アウトティング」があります。「アウトティング」とは、本人の同意なしに性的マイノリティであることを他者に伝えてしまう行為のことです。特に、本人の同意がないのに家族に勝手に話してしまうことは、絶対に避けることです。また、もし、他の教職員に共有したいことが出てきた場合には、必ず本人の考えを尋ね、何をどこまで話すのかを同意を得てからにします。

子どもからのカミングアウトを受け、教職員の理解のもと、子どもに寄り添った取組がなされた事例を紹介します。

- 1 : 図書館に性の多様性に関する本のコーナーの設置。弁論文作成のための参考資料として準備された、井手上漠さんが 2017 年の「少年の主張全国大会」で文部科学大臣賞を受賞したときの作文の紹介など。
- 2 : 体育祭種目についての見直し。種目が多すぎるので、減らす方向で話し合いを進め、結局、男女を分けずに種目を決定。そのための学校側の説明の機会が、学校側の性の多様性についての理解、そして考え方を示す機会ともなった。

以上の取組等から、性の多様性への理解があり、自分のことを分かってもらえるとの確信が持てたからカミングアウトしようとの決心ができたと思われる。

「カミングアウトされたことがない」学校は、まずは、学校の中で変えられることを一つでも見つけて話し合ってみてはと思います。性別二元制、シスジェンダー、異性愛が前提となっている今の教育内容。そして性別二元制からできている現在の学校のシステム。見直すべき点は多いと考えます。「性の多様性にひらかれた学校づくり」が進み、支援体制ができていくことを願っています。

特別支援教育について

特別支援教育支援専任教員について 指導主事(特別支援教育支援専任教員) 大橋 里沙

昨年度までの2年間、特別支援教育担当指導主事として、特別支援学級及び通級指導教室を中心とした学校訪問や、特別な支援のための非常勤講師配置校訪問などをおして、みなさんと一緒に特別支援教育について考えさせていただきました。今年度からは、各教育事務所に配置されている特別支援教育支援専任教員(以下「支援専任教員」)を担当しています。



このたび、本県における特別支援教育を充実させるために、「しまね特別支援教育魅力化ビジョン」が策定されました。これを受けて、支援専任教員の業務についても見直しが行われました。

支援専任教員の業務について

●支援専任教員の役割

市町村立小・中学校からの特別支援教育に係る相談に対して、迅速に対応し、必要に応じて継続的に支援する。

●業務内容

小・中学校における特別支援教育に係る相談に対して指導・助言を行う。

- ①通常の学級における特別支援教育に関すること
- ②特別支援学級に関すること
- ③通級による指導に関すること
- ④校内体制に関すること

特別支援教育について、校内で相談・連携しながら進めておられることと思います。必要があれば、ぜひ支援専任教員も仲間に入れていただき、一緒に考えさせていただけたらと思います。

先生方からの
特別支援教育の相談をお受けしています！
まずは、お電話ください！

相談方法

- 学校
- 【ルート1】市町教育委員会に連絡
担当：教育委員会特別支援教育担当
電話：各教育委員会の番号
 - 【ルート2】支援専任教員に連絡
担当：大橋（支援専任教員）
電話：0855-29-5753（直通）

各市町の取組から ～浜田市～

学校と地域のよりよい連携・協働を目指して

浜田市教育委員会 派遣社会教育主事 原田 千里

浜田市内の公民館（教育委員会）は、今年度からの自治区制度の廃止とともに「まちづくりセンター」（市長部局）に移行しました。これからは、まちづくりセンターを拠点に、それぞれの地域で特色あるまちづくりが進められることとなります。そして、まちづくりセンターは、これまで公民館が有してきた社会教育的機能を充実させ、今後も「人づくり」の推進拠点としての役割を担っていきます。学校と公民館とのこれまでのつながりは変わることなく引き継がれ、今年度も学校とまちづくりセンター（地域）とが連携・協働しながら活動が進められています。



学校現場においては、新学習指導要領が完全実施となったり、GIGA スクール構想の実現に向けた取組が始められたりするなど、これからの未来を担う子どもたちに必要な資質・能力の育成が着実に進められています。

このような状況の中、魅力ある教育の実現に向け、学校と地域がより一層連携・協働し、教育目標を共有し、地域の教育資源を活かした教育、地域学校協働活動の充実を推進していくことがさらに重要になってくるものと思っています。

先日、まちづくりセンター職員や社会教育関係者を対象とした研修会が行われ、地域学校協働活動について下関市立大学の天野かおり先生は次のように話されました。

「学校は、地域に向けて学校教育目標や教育課程等を分かりやすい言葉で示し、地域と共有していくことが大切である。ねらいがしっかりと共有できていたら、学校と地域とが一緒に活動しなくても、それぞれで協働活動として進めることができる（学校は学校、地域は地域でできることがある）。いつも一緒にいることが協働ではない。」

その地域や学校に合ったよりよい連携・協働の在り方や方法を見つけることが大切であると考えます。「よりよい」とは何か…社会教育主事として、関係者のみなさんと共に考えていきたいと思っています。

HAMADA教育魅力化コンソーシアム

浜田市教育委員会 派遣社会教育主事 小川 豊

「しまね教育魅力化ビジョン」には、地域に愛着と誇りを持ち、将来、地域や社会の役に立ちたいという人づくりを進めていくため、地域ぐるみ（学校・家庭・地域の連携）での教育を保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等を貫いた一体的・系統的に進めていくことが必要である、と記されています。

浜田市では、はまだっ子共育推進事業として、子どもたちに身に付けさせたい力について、学校・家庭・地域が共有しながら、浜田の特色を生かした「ふるさと郷育」の推進や地域学校協働活動、家庭教育支援活動の充実を図っています。この取組について、「子ども」の対象を0歳から18歳（高校生）までとしています。高校教育においてより充実させたいという実態がありました。



このような状況を踏まえて、高校の教育魅力化を基盤とした「HAMADA教育魅力化コンソーシアム」（協働体）が、令和3年3月に設立されました。このコンソーシアムは、浜田市内の県立高等学校及び県立特別支援学校（以下「学校」という。）と幼児教育施設、小中学校、地域、企業、大学、行政等の多様な関係者が、主体的・創造的な対話を行いながら「地域とともにある学校づくり」を推進し、各学校の特色を活かした魅力ある学びによる人づくりを支援するとともに、地域活性化の好循環に寄与することを目的としています。

この4月から、浜田市教育委員会学校教育課地域学校連携係に席を置き、派遣社会教育主事の立場として、小中学校と地域連携の充実とともに、「HAMADA教育魅力化コンソーシアム」の事務局として、高等学校・特別支援学校と地域の連携及び小中学校との連携の充実に向けた支援を担っています。

子どもの姿から学ぶ姿勢を

浜田市教育委員会 派遣指導主事 前原 靖子

浜田市派遣として5年目を迎えました。どうぞよろしく申し上げます。

今年度の浜田市の取組について、2点紹介します。

1点目は、市の研究指定校事業についてです。浜田市では「協調学習」(第四中学校・浜田東中学校)、「図書館活用教育」(浜田東中学校・金城中学校)、「ICTを活用した授業改善」(周布小学校)について、各指定校の取組を支援し、それぞれ2回公開授業をすることでその取組を広げたいと考えています。協調学習については、8月5日(木)・6日(金)に、島根県教育委員会と合同で集合研修も予定しております。県内の先生方と、校種を超えて一緒に学ぶ機会にしたいと思っております。また図書館活用教育の指定校である金城中学校は、県の指定も兼ねています。10月21日(木)・11月8日(月)に公開授業を予定しています。

2点目は、浜田市の授業改善方針についてです。新学習指導要領の趣旨に沿い「子どもの声でつくる授業」として、①(授業前)授業のゴールイメージを子どもの具体的な姿で想定する、②(授業中)想定と実際の姿を比較して参観する、③(授業後)実際の子どもの学ぶ姿を出し合っ、次の授業づくりを考える、といった具合に、子どもの学ぶ姿を中心に授業改善を進めていこうとするものです。「どんな子どもも学ぶ力をもっている」と信じ、子どもたちが本来もっている学ぶ力を発揮できる授業づくりを一緒に考えます。どうぞお気軽に声をかけてください。



つながりを大切に

浜田市教育委員会 派遣指導主事 佐々木真理子

特別支援教育の担当をして2年目になります。昨年度当初は先生方と直接お話する機会がなく「つながること」の大切さをより実感しました。子どもたちが笑顔で過ごせるように、今年度も先生方や関係機関の方々との「つながり」を大切にしながら、特別支援教育の推進と充実に向けて取り組んでいきます。

学校訪問

各学校等のニーズや実態に応じて、STEP、特別支援教育支援専任教員、ウィンド、子育て支援課、地域福祉課等と連携した「相談支援チーム」での訪問を行っています。特別な配慮を必要とする子どもの早期発見・早期支援につなげるために、校内委員会で検討の後、ご活用ください。

教育支援委員会

関係機関と連携し、各学校等訪問、保護者面談、教育支援委員会を行っています。各学校等と連携し、本人や保護者の思いに寄り添いながら、丁寧な教育相談、就学相談に心がけています。早期から保護者さんとの教育相談や校内支援委員会での検討をお願いします。その際も必要に応じてお声がけください。

研修会

今後、特別支援学級で使用する教科用図書についての説明会、特別支援学級の教育課程編成研修会、ひらがな読みに困難さのある子どもへの早期支援と日々の授業づくりの充実に向けた研修会の2回目を実施します。また、特別支援学級担任の先生方の学習会も学期に1回行います。先生方のニーズに応じた内容や効果的な支援を行ったり切れ目ない支援を行ったりするための個別の教育支援計画・個別の指導計画・引継書等の作成・活用について研修していきたいと考えています。

引き続きよろしく申し上げます。いつでもお声がけください。



気づき、つなぐ、支える 浜田市教育委員会 派遣指導主事 品川 仁志

浜田市派遣 2 年目になりました。生徒指導を中心に担当しております。1 年以上にわたるコロナ禍の生活で、気づかないうちにストレスをため込んでしまっている場合もあるのではないのでしょうか。心も体も健康に過ごせるよう児童生徒、教職員ともに素敵な人間関係を築いていけると良いなと感じています。

① S S W の活用・・・昨年度末には S S W 評価等アンケートを実施しました。概ね高い評価をいただき、また、貴重な意見をいただくことができました。アンケート結果をもとに 2 名の S S W と協議をし、今年度は事例や S S W 派遣チェックリストを配付し、S S W の活用をさらに進めていけるよう取り組んでいます。

② 夏季生徒指導学校訪問・・・今年度も夏季休業中に関係機関の担当者の方と一緒に市内すべての学校を訪問する予定です。先生方の「気づき」を共有できる貴重な場と考えていますので、よろしくお願ひします。

③ 不登校調査と問題行動報告書・・・浜田市では今年度から【親展】詳細報告について様式を変更しています。これは、先生方の業務負担の軽減を目的とした変更となりますので、新様式を有効に活用していただければと思います。

浜田市の取組について、3 つのことを紹介しました。生徒指導では、多くの場合で初期対応が大切になってきます。先生方の「気づき」が、多くの児童生徒、家庭の支援の第一歩になります。市教委では、その「気づき」を関係機関等に「つなぐ」役割を果たし、児童生徒や家庭、学校現場を「支える」存在でありたいと思っています。どんなことでも遠慮なく、市教委まで相談をしてください。



各市町の取組から ～邑南町～

邑南の未来を創るために 今できること

邑南町教育委員会 派遣指導主事 堀尾亮介

邑南町教育委員会では、「邑南の未来を創る『世界へも羽ばたける力を子どもたちに』』という教育目標に向かって、「高い志、質の高い学びの力」・「人とつながり解決に向かい続ける意欲を育む力」等をつける教育を目指しています。目標を達成するために、「辞書引き学習会」「花まる算数教室」等、子どもたち対象の学力向上のためのセミナーや、「学び合い授業づくり」「情報活用」「多様性教育」等、教師力向上のための学校訪問やセミナーを実施し、学校の支援を行っています。

特に力をいれていることのひとつが、子どもたちの「読解力」の向上です。今まで「読解力向上セミナー」等で学んだことを、すぐに実践しながら子どもたちの学習に生かす取組を行ってきました。

8 年前より、読解力の基礎となる語彙を自分から進んで獲得できるようにするために、知っている言葉を中心に、小学校低学年から国語辞典を引くこと（以下「辞書引き」）にも取り組んでいます。「辞書引き」では、学校生活や日常生活の中で出会った、調べてみたいと思った言葉を自分から調べ、関連することがらを付箋に書き、辞書に貼る活動を行います。小学校 2 年生でも 6000 語以上（付箋で 6000 枚）付箋を貼った子どももいます。この取組では、子どもたちが進んで調べようとする意欲を育むような教師からの言葉かけが大切です。教師とのやり取りをとおして子どもたちは、言葉の意味をより深く理解していくのだと思います。

4 月には、一人一台のタブレット端末が子どもたちの手元に届きました。今まで培ってきた「読解力」がどの程度身についているのかを客観的に調べるために、小学校 6 年生を対象に Web による「リーディングスキルテスト」をタブレット端末で行っています。個々の児童がどのような読み取りでつまづいているのかを見取り、全国学力・学習状況調査の結果と合わせ分析していくことで、読解力の向上につなげていく予定です。一人一人の子どもたちのために何が出来るのかを、学校と一緒に考えていきたいと思っています。

